

いちほら未来ワークショップの実施結果について

千葉大学大学院人文社会科学研究所特任研究員

宮崎 文彦

年末のお忙しい中ご来場いただきましてありがとうございます、千葉大学で特任研究員を務めております宮崎です。私の専門は政治哲学で、現在こちら（法政経学部）で担当させていただいている科目は政治哲学演習ですが、今回、政治哲学的な観点からワークショップの開催を私の方で担当させていただきました。本日は、本年（2015年）8月の市原未来ワークショップの実施結果についてご報告させていただきます。

概要としましては、先ほど倉阪先生からご紹介がありました未来シミュレータの結果を地元の中高生に示し、中高生が多くの課題を総覧した上で、どの課題を優先し、対応していくのかを判断し政策提言する場というものです。今回の市原市のほか、八千代・館山の2市で未来ワークショップを開催することを予定しています。まず手始めとして8月19日、20日の2日間にわたり市原市さんとの共催で中学生39名、高校生1名の参加を得て、ワークショップを開催しました。その前に倉阪先生が非常勤で担当されています多摩美術大学、東北大学の大学院でも試行的な実験を行った上で市原市のワークショップを開催しました。

いちほら未来ワークショップ概要

もう少し詳しく内容についてご紹介させていただきます。対象は市原市在住の中高生を対象にしまして、市の広報を活用させていただき公募し、さらに市の教育委員会のご協力をいただき各学校から手上げで募集をしました。その意味で、もともと意欲の高い生徒さんたちにお集まりいただいたことになると思

います。参加申し込みは当初 48 名でしたが、残念ながら夏休みの時期は部活の大会などがあり、勝ち進んでしまうとこちらに出られなくなってしまうこととなり、参加者の内訳は男子よりも女子が多い比率になってしまいました。もともとの配分でもやはりこのようなことに関心があるのは女子のほうが多いということもあるかもしれません。男女比の割合はあまりよくなかったかもしれませんが、より意欲のある生徒さんたちが集まっていたいただいたので、中身は濃いものになったと思います。

2 日間にわたってのワークショップでしたが、2 日目は先ほどの未来シミュレータの結果を説明し、その後小湊鉄道という市原市の南北を走るローカル線があります、これに乗車し南部の中心部である上総牛久駅まで行きました。そこで街歩きをして 2040 年と 1980 年の地図を照らし合わせ、この街がこれから一体どのように変わっていくのだろうかということを見てもらいました。その後バスで移動し、内田未来楽校という旧内田小学校へ向かいました。昭和 3 年建築の非常に古い校舎で、既に現役の校舎ではありませんが、そこを地元の方々が買い取り、さまざまなイベントを開催しておられます。その話などを聞きながら、里の暮らしを知ってもらおうという意図でした（写真 1）。

その後、臨海部の出光興産さんの見学に向かいました。この臨海部地域は市の財政の 40% を支える地域で、これから先、このような地域がどうなっていくかを考えてもらうことが目的でした。その後、最初に集まってもらった五井駅前のサンプラザ五井に戻り、振り返りと質問の作成を行いました。

2 日目は同じサンプラザ五井でグループワークをし（写真 2）、午前中は課題の書き出しで、2040 年の市原市にどのような問題点が考えられるだろうか。午後には提言項目、未来市長としての政策を彼らに考えてもらい、現在の市長にこんなことを今のうちにやっておいて下さいという提言をしました。

最後に、現市原市長の小出市長に発表をして、小出市長からコメントをいただくかたちで開催しました（写真 3）。実はこういったワークショップをやって中高生からどのくらいのレベルのものが出てくるだろうかという不安がありました。未来シミュレータの結果を示して、それがかなりいろいろな分野

に亘るものだったためか、かなり多方面に亘る提言が出され、現在の市長であられる小出市長からも、大変ありがたい。斬新な意見ばかりで、この年齢で考えてくれたことが財産。未来市長たちに負けないように自分も頑張っていきたい、というコメントをいただきました。各種メディアの取材も受け、千葉日報、産経新聞、読売新聞、朝日新聞、地域新聞の市原北版、シティ・ライフと掲載いただきました。

「バックキャストिंग」で考える

未来ワークショップの特色として、私自身が理解しているのは、先ほど倉阪先生からお話がありましたが、予測される2040年の市原市の様子から起こりうる問題を発見し、今何をすべきかを考える「バックキャストिंग」という方法が非常に特徴的だったのではないかと思います。そう申しますのも、実はこう

写真1 内田未来楽校



写真2 グループワーク



写真3 現市長への提言とリプライ



(出典) すべて著者撮影

いった中高生を対象とした、まちづくりワークショップは全国各地で既に行われており、私が見ただけでも20数個既に行われていることがわかっており、それらの報告書を一通り見てみましたが、どこも一緒に街歩きをして、自分たちの住んでいる地域のよいところ、悪いところを探しましょう、それを書き出してどういったものを残していくかを考えましょう、そのようなワークショップが行われている場合が多く、ほぼ全てがといっても過言ではないほどでした。

それに対して私たちが行っているこの未来ワークショップの特徴は、やはり先ほど倉阪先生からご紹介があった未来シミュレータがあることによって、2040年はこのままいくとこのようになってしまうかもしれません、さてみなさんどうしましょうか、ということを考えてもらう点が、非常に特徴的なのではないかと理解しています。

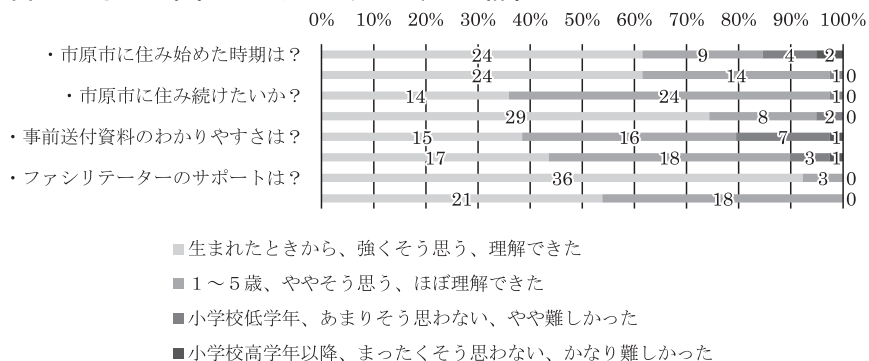
その他3つこれもお話があったと思いますが、多世代共創ということで、中高生を対象にしたことで2040年に社会の中核となる世代が主体となる、情報のインプットによって過去から未来へバトンを渡していきましょうということ、それからなるべく誘導するのではなく、未来予測を示してこうしなくてはいけないというのではなく、中高生自身に気づいてもらうことを目指しました。

熟議による公共性

最後に私は政治哲学が専門であることもあり、熟議として双方の理解、対話の深まりを重視させていただきました。このような熟議を重視する理由ですが、政治哲学で有名な、映画にもなりましたのでご覧になった方もいらっしゃると思いますが、ハンナ・アーレントという女性の思想家がいます。彼女が言っていた言葉で非常に有名なことですが、公共性とは複数性である、ということが挙げられています。

多様な背景を持った多様な人々によって織り成される公共空間ということで、いろいろな人が集まってくることで、公共空間が生まれてくる。そこにはじめて公共性というものが生まれる、ということを彼女は言っていますが、それを

図1 いちはら未来ワークショップアンケート結果



(出典) 筆者作成

今回のワークショップでも私は活かしたいと思いました。集まっていた生徒さんには、なるべく同じ学校の人同士にならないように、いろいろな地域からの生徒さんをひとつのグループにまとめ、そこから織り成される多様性から新たな気づきがなされることを期待して、グループを構成しました。

お手元の資料にはないものですが、5〜6人のグループで全部で7つのグループに分け、なるべく離れている地域の生徒さんをひとつのグループにまとめるかたちでチーム編成をしました。

また、ジグソー法という方法があり、元のグループからチームを再編成し、また戻って議論をしてもらうブレインストーミングの方法なのですが、最近よく取り入れられています。私も別の大学でこのような手法をやっていますが、今回のワークショップでも取り入れ、なるべくいろいろな生徒と交流をもらい、その中から新たな気づきを得てもらえるようにしました。

参加者の反応と今後に向けて

参加の生徒さんたちの意識がもともと高かったと思いますが、非常に満足度の高いアンケート結果を得ることができたと思います。(図1) 大体この緑と赤の部分が非常にポジティブな反応の結果ですが、市原市への愛着もさらに上

がったという結果が出ましたし、未来シミュレータの結果はなかなか理解してもらえないのではないかと懸念がありましたが、事前に資料を配布したことでかなり高い理解があったところに1日目に説明をしたことでさらに、かなり多くのほとんど9割以上の生徒さんがこの資料を理解してくれたかたちで非常に有意義なワークショップになったと思っています。その意味で非常に水準の高いワークショップを行うことができましたし、やはりこれだけさまざまな生徒さんが集まったことによって、異なった場で異なった意見が出てくるという気づきを促すことができたのではないかと考えています。

最後に今後どのように進めていくかについての問題です。1回限りで熟議をすることはなかなか難しいことですので、本当は時間を置いて振り替わりやさらなる議論の機会があるといいと私自身は思っています。もうひとつは多世代競争ということが今回どの程度できたかということは疑問な部分があります。なるべく多世代の人間が加わり、情報をインプットする機会があるといいのではないかと考えています。

次回は来年（2016年）の8月に今度は八千代市さんの方で開催させていただく予定ですが、事前にシニア世代のワークショップを開催し、その結果を中高生の未来ワークショップに活かすようなこともできればと思っています。あるいはこの後に栗島先生からお話いただく社会関係資本についても、既に八千代市では行われていますので、その結果もワークショップに活かせばいいと思っています。

地域的な課題として、市原市は北の方が臨海工業部で南の方が里山の暮らしというかたちになっていますが、交通の便があまりよくないこともあり、参加者は北部の生徒さんが圧倒的に多かったという偏りがありました。熟議の観点からも今度開催していくにはこの点を改善していくことができればと思っています。私も含め院生の方々、市の方々にもご協力をいただき、ファシリテーターになっていただきましたが、さらにこのファシリテーターの役割がもう少し積極的に異なった意見を引き出すように、討論会の司会者のような役割を果たしていただくことも促して、個別の対話から熟議へというかたちで持っていけれ

ばと思っています。

最後に、実はもともとはグループごとの成果の発表ではなく、全員の集約された意見を提言でまとめるかたちを想定していましたが、市長に臨席していただくということで、グループごとで発表することでしたが、もう少しグループごとの提案からどれがいちばんいいかという意思決定を行い政策提言を行うことも、今後はできればいいのではないかと私自身は考えています。

非常に早足での発表となり大変恐縮ですが、私たちが開催しました未来ワークショップについて私自身が感じている意義も含めてご報告をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。